

七絃琴譜《歩虚僊譜》の成立時における歴史的位置付け

-日本所蔵明清七絃琴文献の調査報告-

鳥谷部 輝彦(東京藝術大学)

本発表では日本所蔵文献を用いて、《歩虚僊譜》(ほきょせんぷ)の琴史に対する初歩的な調査報告を述べる。本楽譜は、明清代の中国が出版した七絃琴文献の中で、現代中国には劣等の伝本が所蔵されるが、日本には善本が所蔵されるという日本所蔵善本漢籍の一つである。このような日本所蔵文献を参照すれば、中国所蔵の七絃琴文献の欠如を補い、琴史を更に詳しく追究することが可能である。本楽譜の伝本は現世界で二点存在する。一点は中国藝術研究院音楽研究所蔵の刊本であり、第五巻と第六巻のみを備える残欠本である。もう一点は国立公文書館内閣文庫蔵の刊本であり、序文、指法解説、第一巻から第九巻、及び跋文を完備する完本である。中国では残欠本のために研究できず、撰者に関する推察がなされたただけである。日本では全く研究されていない。本報告は内閣文庫本に基づき、本楽譜が成立するまでの時期を対象としており、成立以後の中国・日本における受容についての報告は今後の計画とする。

本楽譜は顧挹江(コ・ユウコウ)の撰により、嘉靖三十五年(1556)に成立した。顧は雲間(現上海市松江区一帯)の出身で、左府を務めた。

楽譜本文の分析では次の結果を得た。(1)本楽譜は16世紀の廃絶曲を多く載せる。則ち「寄情操」「静極吟」「読書吟」は現存琴譜に一例のみを確認でき、「乃歎吟」は現存琴譜に見られない新出の琴曲である。(2)五声の「商」には「商」字を用いる。(3)楽譜編集における琴調と曲目の配列順が、正調五調に始まり、清商調の「秋鴻」で終わる。この構成は、「徐門正伝」(浙派の正統)である《梧岡琴譜》(1546年序)を踏襲する。これらによって、本楽譜は嘉靖年間(16世紀中葉)の浙派の琴譜であり、琴史の新たな一面を明らかにする貴重な資料であると言える。

本研究活動には、カワイサウンド技術・音楽振興財団から助成金の支援を受けている。